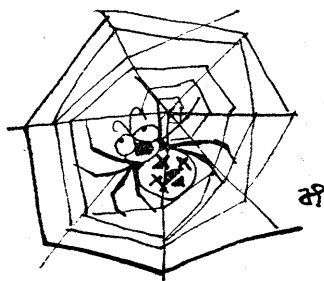


幼児のボール遊び(ボールゲーム) に関する研究(2)



岡本 卓夫・西真田光代・三谷みや子

四 方 法 観察及質問法

(イ)環境 観察者は遊戯室の片隅に、その計時、記録を幼児に知られない様に位置し、担任教師は他方の隅で幼児の遊びを見守っている。

(ロ)使用ボール 第一回実験に於て得た結果から、一応次の三つを選んでみた。(1)幼児用色彩ボール、(2)テニスボール、(3)ピンボンボール。

(ハ)ボールの与え方 最初は幼児用色彩ボール、テニスボール、最後にピンボンボールの順に与え、各々のボールについて三分間ずつ遊ばせた。

さあ遊びなさい。』この様にして子供がボールを手にすると同時にストップウォッチを押した。

(ロ)観察内容

- (1)遊びの種類、及その遊びの頻度と時間。
- (2)遊びの様式。
- (3)遊戯中の身体支配とコントロール。
- (4)遊戯中に生れているルール。
- (5)其の他。

(ハ)質問内容 テスト終了後一名宛呼び出し次の様な質問をした。『Aちゃんは二人でボール遊びをする時、何をして遊ぶのが一番好きですか』と質問し記録用紙にマークしていた。

五 結 果

A遊びの称類及頻数と時間

第一表に示す如く種々の遊びが行われているが、第一回実験のものと比較するとその遊び方は相当多くなっている。そしてこれ等遊びの原因をなしているのは、ドリブル、投、捕、転がす、蹴る、打つ等であり、これ等が、彼等の知的、社会的、身体的諸能力の発達に应じ二人の間で色々に組合されて行われている。

第一回実験(三月号)に於ては幼児がどんなボールを好み、それをどの様に操作するかについて一人宛観察研究したが本実験に於ては二人でのボール遊びに就いて研究する。

一被験者 満五歳児、男組五、女組五、男女組五、計三〇名

二期 日 昭和卅年十月廿一日

三場 所 徳島市方上保育所

る。中でも特に愛好される遊びは、男子組では投げ合い捕え合い、所謂投捕球と転がし合いで、女子組では断然ドリブルとなっている。(第一・二表参照) 男女ミックス組ではどちらかが納得して遊ぶものは投捕球くらいで殆んど自分の好きな事をして遊ぶと云う平行遊びが多く二人で仲よく遊べると云う目立たしい遊びは見受けられない。

(第一表)

	遊 び の 種 類	頻 数		時 間	
		F	T	F	T
男子 二人組	手まり遊び (約5m間隔で坐位或は蹲踞)	3	3.5	4'30"	5'1"
	転がし合い (約5m間隔で立位)	8	2	12'50"	1'7"
	蹴り合い (約1.5m~3mの間で適宜伸縮する)	2	5.5	1'30"	7'2"
	投捕球 (約1.5m~3mの間で適宜伸縮する)	10	1	12'40"	8'0"
	転がしたボールを他方の子供が打つ	3	3.5	5'0"	4'4"
	投げたボールを他方の子供が打つ	2	5.5	5'0"	4'4"
女子 二人組	手まり遊び (約1m~3mの間隔立位)	15	1	42'0"	1'3"
	投捕球 (一人が手まりをして逃げ、他のものがそのボールを取るために追っかけて遊ぶ)	2	2	2'20"	2'2"
男女 組	手まり遊び (2m~3mで立位)	4	3	7'0"	3'3"
	投捕球 (4m~5m間隔)	5	2	8'50"	2'4"
	転がし合い (4m~5m間隔)	3	4	3'0"	4'4"
	各々自分の好きな事をして勝手な遊びをする	9	1	21'50"	1'1"

* ボールの種類によって特別な遊び方が行われなかったものでその種類別な考慮をせずに性別のみにとどめた。

(第二表) 質問結果

	1 位	2	3	4	5
男	投捕球遊び	転がし合い	手まり遊び	転がして来たボールを打つ	投げたボールを打つ
女	手まり遊び	——	——	——	——

B 遊びの様式

最初教師の動機づけが終ると大体の傾向として、性格的に強い或は活動的な子供がその主導権を握り先にボールを取り最後までリーダーとなっている。又ボールを取ってから相談を持ちかけたのは男女組では5組程みられ全部男子の方から働きかけている。同性組に於ては男子組2、女子組3となり、少なくなっている。そして主導権を握った子供がリーダーとして命令的に『お前向へ行け』とか「私が先よ」等云って、投げるなり、転がすなり、ドリブルなり自分の好きな遊びを始め、他の一人の子供はそれを模倣するにすぎない。途中別な遊びがしたくなった時は、リーダーになったものが黙って勝手に投げたり、転がしたりする。又「投げ合いせんか」等大きな声で相手をリードしてゆく活発な子供が相当数あった。じゃんけんで順番を決めたのが女子組に一組又十までの数を読み乍らドリブルしたり、歌をうたって(鬼の餅つきへっぽんぼん)遊んだのが女子組に六組あった。そして女子組では十五組まで全部の組が多少なりともドリブルを

している。この点男子組ではより大筋肉を使用した活発な種々な遊びがなされその様式もダイナミックである。部屋広さとか能力によって自然二人の間の距離も制限されているが大体五米四方の中で遊びが保たれている。何れにせよ、同性間に於ては、断片的にその遊びが移って行くといえども、何とか協力し合って二人で遊んでいるが、異性組では、唯適当に時機をみて他の子供にボールを借してやろうかと言う様子をしたり、又欲しかったら取り上げると云う具合に組織的な相互関係をもった同一遊びを共にすると云うのは殆んどみられなかった。

C 身体支配とコントロール

この年令に於て身体支配とかコントロールの発達は未だ不十分である。例えば飛球に対しての身体の移動は、それが落下して動作を起すとか、小さな球の投球に於て、右足で投げの時、右足を出して投げるもの、又その捕球に於て両手間を拡げすぎているとか、投球に於て、スピードがあり過ぎたり、大き過ぎたり、小さすぎると云う場合が屢々起っている。大きなボール(幼児色彩ボール)の捕球に於て両手を拡げて前に出しているが、その

手にボールが当たってから捕え様とする等、反射運動の未発達のために多くは失敗している。小さなボールは二人の間隔が狭い場合でも殆んど捕球に失敗しているが、大きな場合その距離が二米以内くらいで下手投げでゆるい山形投球なれば大体成功していた。大きなボールは男女を問わず片手で投げた子供は居らず、両手で担ぐ様にして投げるか、下手投げであり、指先のスナップは全然使われていなかった。ドリブルは女子に於ては大きなボールなれば全員上手につけていたが、小さなボールでは、手腕のコントロールが充分でなかった。特にピンポンボール等は急速にはつむが故に、タイミングに於て殆んど失敗した。この様に身体的面にも幾分未分化な状態がみられた。

D 遊戲中に生れているルール

ルールと云つても未だ彼等の発達段階に於ては言葉ではっきり言い現わすことが出来ない。即ち「一度はつませる様に投げる」とか「十回ついたら交替する」等が遊びを始める前に約束されてない。従つてその遊びの主導権を握つたものの仕方を模倣するに過ぎない。そしてこれが自然に二人間の約束とな

りその遊びのルールとなつて生れているのである。然もこれ等は遊び(投捕球、ドリブル等)を唯為すためにのみ生れ、使用されてい、その遊びを競走的にやるとか、変化を加えるとかの爲の所謂反則らしきものは殆んど生れて居らず、実に簡単なものである。主なルールは第三表に示した通りである。

第三表

ルール	遊び
1 一定回数(数)を読むか歌をうた	手まり遊び
2 一度で交替。はづまな様に転がす	転がし合い
3 二度はつませる様に投げる。	投捕球遊び
4 片手の平手で打つ(蹴す)	〃
5 ボールを取つた者が投げる。	打球遊び
6 ボールに触れた者と交替する	ボールのうばい合い
7 ちやんけんで順番をきめる	手まり鬼
8 自分の位置から投げる	手まり遊び
9	投捕球遊び

以上幼児五歳児二人での自由なボール遊びに於いて観察される種々なるものに就いて報告した訳であるが、尚次第に人数の増加に於けるものをも実験してゆくの、これ等に関する全体的結論はそれ等が一応終つたところだと思つてゐる。

六 結 論

幼児(五歳児)二人でのボール遊びに於て、A主として行われる遊びは、男子組では、投

捕球、転がし合いであり、女子組では手まり遊びである。男女組は平行遊びが多い。
B 同性間での遊びは協力性がある。
C 性格的に強い活動的である子供が最後までリードして遊ぶ。

D 身体支配及コントロールは未だ充分ではないが、大きなボールを使用する時とか、距離が短い時はハンドリングが上手に出来る。

E 彼等のルールは、お互に模倣することから生れているが、プレイをするためにのみ生れているのであつて、反則的内容はない。

F 二人の同性間なれば充分仲良くボール遊びをすることが出来る。

以上二人でのボール遊びに就いての実験結果を報告するが、これ以上の人数のものに就いては紙面の都合で次の機会にする。

(徳島大学学芸学部体育研究室)

× × ×

× ×